

奥羽地方北部の縄文文化の終末と それ以降の文化

—井上 久君の見解に寄せて—

江坂 輝 彌

はしがき

井上久君は故喜田貞吉博士などの考説に近い考
えを持ち、最近、岩手史学会昭和三十二年春季
大会の考古学部会では『縄文式土器文化期の地域

差について、—津軽・下北地方を中心として—』

と題する研究発表をなし、^{註1}続いて『國史研究第十・

十一合併号に、『津軽地方における石器時代の蝦

夷』、^{註2}『東奥文化第十二号に『津軽地方における先

史農耕について』^{註3}などの一連の労作を発表してい

る。しかし井上久君のこれらの一連の労作を拜見

すると良く多くの参考書を見ていることは判るが、

考古学研究上に必要な常に先入観を捨て、白紙で

素材に取組むと云う態度が欠けており、文献に記
録されるところは、その当時の編者、著者が如何
なる環境のもとに執筆編集したものであるかも全
く考慮せず、文献の記載に萬全の信を置かれてい
ることは大変遺憾なことである。

私は井上君が非常に勤勉な新進の研究家であり、
氏の終ゆまぬ努力には常に敬服しているのである
が、考古学徒としてその研究方法などには甚だ遺
憾な点多く、氏の將來の大成を期すために敢て筆
をとった次第である。

本稿を一読され、再検討熟考の上、また新に見
解を披瀝して下さることを望むものである。

なお筆者はこのような問題について、一、二、

過去に発表したものがあり、これも併せて御一読いたされば幸である。^{註4}

本稿では本誌前々号所載の井上君の記述の批判を中心として記述を進めることとする。

本論 一

井上君はそのはしがきにおいて「蝦夷は疑いもなくアイヌの一族であつて、且つ彼等は平安時代末期、古録倉時代初頭に至るまでも縄文式土器の使用しており、石器時代に他迷していたと考えざるを得ない結果に到達するのである。」と断じ、そして「未だ石器時代に留つていたと思われる鎌倉時代初頭までの蝦夷について、青森県内の津軽地方を中心としつゝ、右の見解に導いた私の研究の一端を述べてみたい」と記している。

なお井上君の稿を拜見すると松本芳夫博士も縄文文化人をアイヌとされているように思われるが、博士は文献にあらわれる「えみし」「えぞ」についてアイヌではないかと、考えられているようであるが、縄文文化人に対しては文献史学の論及

すべきところでないと思われ、想定もさし控えられるところである。

また縄文文化の下限を鎌倉時代にまで下降させて考えられたのは過去においては喜田貞吉博士の一人であり、現在日本考古学を専攻する学者の中にはこのような考えを持つ学者は一人もないと申しても過言ではないと思う。

井上君の師であり、井上君に近い考想を披瀝している清水洞三氏にしても、同書の如く断定的な言辭の使用は避け、今日の考古学研究には未解決な問題多く、一般縄文文化研究家のオーソドックスな考え方に対し、今日までの研究成果では文献史学の記録も参考として、このような反論もなし得ること、反論の限界を示したもので、努めて断定的言辭を避け、一つの可能性として論じている。井上君はこの清水氏の考え方を断定に変え、さらにこれを強調するような論考とされており、清水氏にも決して同一見解とは考えられない。

井上君はまた「津軽地方で多く見受けられるのは、下層式、上層式の円筒式土器及び竜ヶ岡式土

器である。これに比し後記の土器と目されるものは少い。』と記しているが、これは何を基準にして記したものが判断に苦しむものである。

奥羽地方北部の縄文文化後期の土器形式の編年的研究は南東北地方に比較すると非常に遅れており、後期の各形式土器の形式名も付されていない現況であるが、少くも五形式以上に編年し得ることは明らかであり、青森市周辺にしても、岩木山麓にしても、また津軽半島部においても、各地から後期の各形式の土器片が発見されているのである。ただ時期により多くつくられる土器の器形が薄手の大型の鉢形土器などが多く、偶然の機会に器形のわかる程度のもので出土が少いために、素人の注意を引くことが少いため、この種遺跡は余り注意されずにおり、今日までのアマチュウの蒐集品のみに注意を向けていると井上君の考之のような錯覺に落ち入ることもあるが、土器の形式分類に精通し、自ら各地域を踏査し、遺跡を地表面から探査しても同君の考之が錯覺であることはすぐ気付くところである。

考古学の研究は自らの足で先ず踏査してみるこれが研究の第一歩であることを忘れてはならない。遺跡数は津軽において後期も晩期もその変化はないのである。

また同君は津軽地方からは同一遺跡内から縄文式土器と共に、磨製石器及びろくろ使用の認められない土師器、更には粗雑な須恵器片が発見される例が多い。須恵器はろくろ仕上が普通であるが、この地方のものにはろくろ仕上の痕跡の認めれぬものも多いのである。縄文式土器と土師器とが同一地盤から併出し、弥生式土器を伴わせる例としては、昭和二十六年発掘の東津軽郡小湊町下槻邊跡（慶応大学考古学研究室発掘、未報告）があり、また昭和二十六・七年早稲田大学考古学研究室発掘の西津軽郡森田村からも併出の報に接している。』と記し、続いて『しかし同じ土師器でも、ろくろ仕上のものところろの痕跡の全くないものとは、それを作つた種族が異なるものと私は考えている。ろくろ使用の痕跡を見ざる粗雑な土師器が縄文式土器と併出するのは、全国的に見ても

珍しい例であり』と記しているが、これも同君の大きな錯覚に外ならない。同君は同一遺跡内からとか、同一地盤上から併出し、とか、また混同して出土するなどの語を使われているが、同君は伴出と混在と云う如き考古学上の用語を良く理解されないようであり、また、どのような場合を確実に伴出、存在と考えるかなどについても充分な認識を持たれていないように思われる。

また南東以西の土師器はろくろを使用してつくられたもののように思われているらしいが、ろくろを使用したと思われるものは殆んどなく、輪積みによつて成形されている。ただ口頸部など成形後に、ぬれた布或はぬれ手の親ゆびと人指ゆびで口頸部の内外両面を軽くおさへて、口唇部に沿つて一廻転させ、表裏の器面を調整しているもので、その時についた口唇に平行な細い條線をろくろ目と誤認することは極めて多い。弥生文化の中期以降にろくろが使用されはじめたなどと記した著書もあり、これはこのような誤認からきたもので、井上君も恐らくこのような誤った著書を謄まれて、

南東以西の土師器はろくろ使用によつて成形されたものと確信されてしまったものであろう。

南東以西の地方においても、須恵器にも古墳時代のものの中には小皿なごろくろを使用したもので製作したものがある。しかし大体土器をろくろを使用してつくる製法は古墳時代の後期に須恵器の製法と共に大陸から伝えられたものであろう。

従つてろくろを使わないで製作された土師器は種族が異なるのではないかなどと云う同君の考えは成立しないことになる。

また同君は小湊町下視遺跡において同一地盤上から縄文文化後期、晩期の土器と土師器が併出したと見、共存したと考えられているが、私はこれは縄文文化後期、晩期、土師器と三つのそれぞれ時期を要にする時代の遺物が重複して同一地区から出土したものと見做すべきであると考え、即ち三つの異つた時期の集落が偶然同一台の上に立地したことによるものである。

考古学上で共存したと考え、同一時期の遺物と考えるためには、同じ土層中の大略同一層位から

遺物が出土したと云う程度のことでは充分でなく、下掘遺跡の土器の出土状態から井上君の考えられたような断定はなし得ないのである。後世に全く攪乱を受けた痕跡のない、貝層を構成する貝類の種類も大略類似する同一貝層中から発掘された遺物、住居址の同一床面上にある復原可能土器など云う場合は同一時期のもので、共存したと証し得るのである。

下掘遺跡は慶大の藤田亮策講師・清水潤三助教授などが中心になつて発掘調査が行われたもので、近く清水氏などにより報告書が公刊されることであらうし、数日を見学したにすぎない筆者が同遺跡について茲に多くを語る必要はないと考える。

かつて喜田東吉博士が八戸市八幡、明治小学校校庭遺跡を調査され、縄文文化後期、晩期の遺跡地から土師器、須恵器、鉄滓が出土すると大内題にされたことがあったが、近年再び同遺跡を私達が調査してみると縄文土器の包含層を掘りおこして、黒土層下の火山灰層へ三〇センチ以上掘り込んで堅穴住居を作っているのが、土師器、須恵器を使

つた人々で、この深い堅穴の床面からは土師器や須恵器のみが発見されている。土木工事で出土地点、層位なども注意せずに発見された同一地区の出土遺物のみを観察すれば、縄文土器と土師器、須恵器、鉄滓などが共存したように錯覚を起すこともあるが、考古学研究の素養があればなお疑いを持ち出土状態など詳細に観察してこの疑問の解明に努力するのが常である。八幡遺跡の場合も発掘調査により、この地で土師器、須恵器を使った人々が生活したのは、縄文文化晩期の人々が集落を営んだ後、かなりの年代を経てからのことで、縄文文化晩期の人々の生活した跡が地表面には全く痕跡を残さなくなつたほど長い時間の経過があつたものと考えられる。即ち縄文文化晩期の時代の墓地であつた地域にも堅穴住居を作っており、恐らく木製の墓標の如きもの^{註4}か、盛土のような前往者の墓地と思われる標識は何も残っていないかゝつたと考えられ、恐らく掘り起すうちには人骨も出土したことと思われるが、獸骨片ぐらいに軽く考えて別に気にも止めなかつたのではなからうか。

私達は土師器を使つた人々が掘りかえさなかつた僅かな場所^にに今日まで遺存していた保存状態の極めて不良な縄文文化晩期の人骨数体と、この人骨に副葬したものかと考えられる晩期の雨傘式の土器を人骨の周囲から数個発掘した。この人骨の周辺には復原することのできた雨傘式の土器があつたのみで、土師器や須恵器は破片も見出すことができなかった。

西津輕郡森田村からも併出の報に接していると記しているが、井上君は古代5号の西村正衛氏などの報告を^{まじ}えられたのうに理解されたのであるうか、考古学的に素直に理解すれば同時存在とか併出などの考えは思いも及ばぬところではなからうか。縄文文化中期、晩期、土師器出土遺跡が、それぞれかなりの距離を隔つた別地区に所在し、いずれの土器も一遺跡で混出しな^い場合は、同時存在とも、それぞれが時間的には隔りのある全く別個の時に営まれた集落とも全く判断を下し得ぬものである、近い距離内に全く別個の様式の土器を出土する遺跡が三ヶ所あるからとて、それを同

時存在の対立した異民族、異部族の遺跡など想定を下したとすれば、これは既に考古学研究の範圍を逸脱したものである。

このような考えが許されるならば近畿地方の奈良県などにも各地に縄文、弥生、土師器の併出遺跡なるものが存在することになり、井上君の理論は根底からくつがえされることになる。

樺原神宮外苑遺跡の如く一地域から縄文文化後期末から晩期を経て奈良時代まで続く遺跡など同君はどのように解釈するであらうか。

畿内における毫々岡出土の土器と同じ器形、文様を持つ土器は、文様器形が殆ど全く同じでも時間的にみれば津輕のものは遠い隔りがある。数百年、数千年の時間的差がある云う先入観はなか／＼抜きさることは困難であり、このような先入観に立つて種々の遺跡遺物をながめるために以上のような不合理が生じてくるのである。

大和朝廷側の人々によりて編纂された、極めて不確実な伝聞をもととした奥羽地方北部の史実をそのまゝ鵜呑みにしてかゝると、前記のような先

入鏡が生れ、無理な想定を案出しないう限り不確実な記紀などの所謂史実に適合させてゆくことが困難になつてくるのである。

井上君の論理の根本欠陥はこのような点にあり、今日の考古学上の研究成果からしては縄原遺跡の縄文文化晩期の土器と津軽の縄文文化晩期の同一形式の土器の間には、その使用期間が時間的隔りなく、殆ど同一の時期に使われたとする証左はいくつか上げることが出来るが、両者が時間的に大きな隔りがあると云う証左を示すものは何もない。

また同君は「関東・関西における弥生式文化、古墳文化の時代は、津軽地方においては晩期縄文式文化の最盛期であつて、一中略—その後の古墳時代末期以後において、はじめて関東・関西方面よりする所謂日本民族の文化と接觸したことを示すものと考へた方が合理的であらう。

勿論一部地方には、開拓の先駆者が弥生式文化時代後半頃から入殖して、中略：最近伊東信雄氏によつて紹介された田舎館式土器は、この先駆者達が移入した弥生式土器の影響を受けた、津軽版

麦の作つたものであらうか、この時に移入された弥生式土器の編年上の年代が明らかにならざる限り、田舎館式土器の編年上の位置もまた明かになし得ないのである。この式の土器はむしろ、津軽地方の晩期縄文式土器時代の下限が、遙かに降るものであることを示すに云々ざるを得ない。」と記しているが、前記した如く関東、関西の弥生、古墳時代に津軽では縄文晩期の文化が栄えたとする考古学的な証明はない。これは文献を以ての単なる想定である。蝦夷は日本人とは異つた異種族と考へることも文献上でのことで、同君が文中に引用している藤田亮策先生の考へ方が正しいものと私は考へている。

考古学的な資料よりすればたしかに古墳時代後期頃から後の畿内の文化は奥羽北部にも広く広がっている。今更私達が八戸市で発掘調査をした小円墳群も古墳時代後期のもの、内部主体の構造はかなり形のくづれた簡単なものであつたが、副葬品の示すところはまさに古墳時代後期のものであつた。この時代の須恵器や土師器は下北半島や

津軽半島でも発見されている。これは戦内の文化がこの地方に土着の日本人の向にも浸透してきたことを示すものに外ならない。

縄縄文化と同拓の先駆者の遺した弥生文化であると考えたのは清水洞三氏である。

縄縄文化は大洞A式に継続する文化で、層位的に縄文化終末の文化より新しい文化であることが立証された遺跡も数箇所ある。

青森県下でも大洞A式の後半の形式以降の土器片のみを発見する遺跡には毛屑や石鏃などの石器が殆どなくなり、鉄製の利舌が使われるようになってきたことを示している。これは大体弥生文化の中期の頃に該当する。しかし岩手北部や青森県南部地方などでは、奥羽南半から北上川中流域地方にまで浸透した弥生文化の稲作農業は、奥羽北部の気候環境に制約を受けたためか、それ以北の地へは鉄製品のみが伝えられ、縄文末期以来の生活が続けられていたものと考えられる。即ち西日本に渡来したいくつもの新文化を西日本の縄文化晩期の人々が消化して己のものとし、新しい融

合文化を創造したのが弥生文化で、これが西日本から東日本の縄文化人に伝えられ、縄文化から弥生文化へ変遷したと見るのが今日の考古学研究的成果から見たオーソドックスな見方である。

井上君の記載を見ると青森県の南部地方は弥生文化の人々が遺した遺跡で、それは清水氏の云う南拓の先駆者であるが、田舎館などのものはこの影響を受けた津軽系^{註3}の作ったものではなからうかなどと考え、あくまで先入観にその考え方が拘束されている。

又同君は田舎館遺跡に関して、今年十月末発刊の東奥文化第十三号誌上に、^{註3}四世紀の頃、津軽の田舎館地方に米作が普及したと考えるのは早計であらう。しかし秋田城が築かれた頃には、北地開拓のために蝦夷地の奥に進出した和人の存在を認めなければなるまい。田舎館式土器はこれら多数の人々のもたらしたものであつて、津軽地方の米作の直接の原因とは考へ難い」と記している。

このことも同君が奥羽地方の弥生文化研究の推移を絶えず公正な眼で広く見渡していないために、

先入観に作用された大きな誤りである。最近、裏日本は山形県北部から秋田県北部まで各地に奥羽南半の弥生土器に関連ある土器が発見され、炭化した物や、弥生土器に伴う特徴ある石器などの発見も報せられ、また田舎館遺跡そのものも今秋の伊東信雄教授の発掘調査によつて弥生文化のものであることが明らかになり、井上君の考案のよう

に秋田城の構築時代の如き新しい時代にまで下降するものではないことが明確になされたとしても過言ではなからう。

私は諸種の観点から田舎館式土器の使用された時代は、その下限が四世紀より更に逆上するのではないかと思つてゐるほどである。

詳細は後記するが本州では西日本と東日本で縄文文化の終末期には大差なく大洞A・B式まで栄えた奥羽地方でも、西日本との差は大きく考えて数世紀で、五百年を越すような差はないと考ふる。従つて奥羽北部の山向磯地でも40—世紀を降る時期まで縄文文化晩期末の文化が栄えたとは考えられない。

また奥羽地方の多くの地名をアイヌ語で解釈し、奥羽地方にアイヌが當つては多数居住したとする金田一京助博士の考へ方は、もう既に過去のものである。金田一博士のアイヌ研究の業績は不朽のものであり、博士の今日までに残された多くの研究は、今なお私達を啓発して下さるものが極めて多いのであるが、奥羽地方以南の地名研究の如きは今一度根柢から再考の要があるものと考ふる。

畏友大野晋氏もこの点に注目し、金田一博士や服部四郎教授などはアイヌ語に關し誤つた理解を持たれてゐる。この点井上君は大野氏の著書を読まれながら気付かれなかつたことは遺憾である。

私は本稿では後稿で考古学的な見地からこの問題に対し私の見解を記す予定で、先ず井上君の論文に対する批判から筆を進めたのであり、こゝに私の専門外の言語学的な立場からの批判は、大野氏から聞いた要点のみを記すに止めておく。即ちアイヌ語と云われアイヌの使用している言語の語彙の多くは固有のアイヌ語でなく、隣接地に住み常に文化的な恩恵を与えていた古代日本人の語つ

ていた言葉を自分のものにしてしまつたものが多いらしいと云うことで、現代の日本語の中には全く残らないもので、アイヌ語と混つたものが、日本の南端八重山などにも残つており、古い日本語であることが判明したものなどもあり、個々のアイヌ語を究明し、そして残金の外来語が明確になると、今日関東・奥羽などでアイヌ語として解釈された地名も、縄文文化時代の古い日本語であつたと云う証明が成立するのも夢ではないかも知れない。

また井上君は「私は津軽地方に多く存在する館（土城址）が蝦夷の住居址であり、また蝦夷がアイヌなりとする説にも一理があることを、改めて認識した次第である。……中略……これに対し、津軽地方の竪穴は相當に大きな館の中にあるものでも、群をなし大集団をなしているのは珍しく、その数の多い場合でも、すべてが同時に存在していたものとは考えられない。」と記した五節で、土器を廻した遺跡内からは各種の土器、石器を多く出土している。……中略……館が蝦夷の住居址であ

り蝦夷はアイヌであるとなれば、……」と記している。

同君は館の住人が石器時代の生活をし、縄文土器を使ったことは記していないが、嘗て喜田貞吉博士が八戸市是川遺跡を前九年、後三年の両役時代、或はそれ以後ではないかと考えられたと云うことを、一極に否定できぬものがあると信ずるところを、記しているところから考へると、館の住人は縄文文化晩期の時代に近い生活をしていたものと考えられているようにも受けとれるのである。また同君が館内に出土の縄文土器や石器を館を構築した人々が使つたものと考えているらしいことは、前記した同君の第五節の記事によつても考へられる。

館の所在地は多くの場合、前代の縄文文化の各時期の遺跡と重複する。即ち館を築いた人々は遠い過去にその場所に縄文文化人が居住したことを全く知らずに住んだのである。私は下北半島やその他の場所で館や館の背後にある竪穴住居址の発掘調査を行ったことがあるが、床面から発見されるものは土師器の復原可能な土器や須恵器、鉄器

品などで、縄文土器の復元可能なものや、大破片は発見されない、また館の周囲の空壕内からも鉄製品と土師器、須恵器の比較的大破片は発見されるが、縄文土器片は周囲の包含層に包含されていた小破片が壕内にころけ落ちたと思われるようなものが稀に発見される程度である。

話題が一寸横道に入るが前記した才三第の終り頃の文で、発見の堅穴住居址がすべて同時に存在したとは思われないと記しているが、このようなことは関東以西にも言い得ることで奥羽北部のみのことではない。私は奥羽地方北半の館及び館の背後などに土師器、須恵器を出土する堅穴集落の中には関東地方などには見られない密集した規模の大きい堅穴集落が各所に散在していることに注目しているのである。

この館の問題についても井上君は自身が岩手、山形、秋田、青森などの館を詳細に観察していないことをよく暴露している。恐らく青森周辺の館を数例見られ、津軽地方のものを若干踏査した程度と思われる。しかしこのことは同君が多忙な学

業の寸暇を割いての熱心な研究で、乏しい研究費を使つての仕事であり、同君を責めることはできない。

一度規模広大な聚落とした館を見たなりは、鉄製の立派な土工具を持った、高度の土木技術を有する、文化程度の高い人々でなくては構築できぬものであること判然とする。大和朝廷の人々が用水池を^堀つたり、大古墳を作つたりしたのと、同様な技術が必要であり、同程度の文化階程に達していなければ構築困難なもので、縄文文化晩期や、関東、奥羽南部の弥生文化の時代の人々の文化程度の地獄は作り得ぬものであることを先づ認識して欲しいと考える。

これは若干の土木工学の素養ある人であればすぐ気付くことであらう。

また金屋器も使用したが石器も使い、縄文文化晩期の文化階程から殆ど進歩しないような民衆であれば、大和朝廷の精鋭にはひとたまりもなく降伏してしまつたと思われる。

米代川、北上川流域などの所謂館の配置が若干

の時代の先後はあるとしても、そのすべてが要害の地に設けられ、南から進んで来る大和朝廷の軍を挟撃するような配置にある。これは航空写真と航空機による図上調査をやったならば、かなり興味ある解答がでると確信する。

この館と蝦夷の興味ある問題の詳細は後日別稿で論ずることにするが、縄文文化晩期の時代、弥生、古墳時代を経て奈良時代に達した奥羽地方の土着日本人は、九州方面よりその発掘階程で若干の遅れを見せたが、三世紀の終りか、四世紀に入つては小部族国家を各地につくる体制にまで進化したものと想定され、五世紀から七世紀に亘つては勢力のあるものが周辺を併合し、強力な小国家へと発展して行ったものと考えられ、この奥羽地方の小国家は、北海道のアイヌを懐柔し、北海道の資源を思うまゝにし、またアジア大陸とも独自の交渉、交易を行つたものと思われ、館などの構築技術は東北アジアから学んだものと思われる。また大和朝廷側とも住民の間では交易があつたが、九州地方の諸国家同様に大和朝廷の傘下に歸属す

ることはいさぎよしとせず、強力な対抗国家として北を君臨したために九州地方同様、奈良、平安時代までの奥羽地方は大和朝廷側の記録では不明な点が多いのではなかつたかと考えている。なお奥羽地方の小国家は複数であつたか、軍数であつたかも今後の研究によつて解明すべき問題であらう。

ただ今日の考古学者が考古学研究成果から歴史学者に注意をうながせるのは、七世紀から八世紀の奥羽北部の文化は、強力な小国家を作るほどの高度の文化をもち、大陸とも独自の交渉、文化交流を保持していたと云うことを明示できることである。

以上で井上君の論考に対する忌憚のない批判を終ることとする。一定主要点については反論したが、まだ蓋せぬ点が多い。私は同君のこの論考を読み、東京での一年間の同君の遊学が無駄でなかつたことを知ると共に、余り他の人々の研究成果を知らぬ同君には一年間の清水氏の講義、清水氏の試論が余りにも同君の頭に深くこびりつきすぎ

たのではないかとの気もするが如何なものであろうか。

これを転機として是非反省の上、新しい分野への開拓に努力し、えみしの国の歴史を明らかにしていただきたいと思うものである。

二、

次に奥羽北部の縄文文化の終末とそれ以降の文化の変遷について、私見の概略を記すことにする。

奥羽地方北部の縄文文化の終末は西日本の畿内方面よりはかなり遅れ、数百年或は千年に近い差があるのではないかと考える学者は近年に至って極めて少なくなってきたが、今日でもこのような考えを固守する人々もないではない。このような考え方は先史考古学を専攻する人より、日本古代史を専攻する人に多く、これは前記した如く古文獻を無批判に鵜呑みしてしまつた先入観から来る弊害に外ならないと思うのである。

私は縄文土器の製作にあつて、全く同一文様の同一器形の土器が作られる一定の地域は一つの

文化圏であると共に、一つの交易圏であると考えられる。この交易圏では海岸の魚貝が内陸地方に運ばれ、山岳地域の山幸が海岸地方に運ばれたと思われるが、これらの資料を今日に残る遺物によつて証明し得る遺跡は極めて少ない。滋賀県大津市石山寺公園内にある縄文文化早期末の貝塚は琵琶湖産のセタシジミの貝殻を主とした貝塚であるが、このセタシジミの貝殻に混じつて僅かな量であるがサルボウ、ハイカイ、イホニシなどの海産の貝類や、種不明の海産魚類の骨が発見されており、当時すでに瀬戸内海岸の大坂湾方面或は日本海方面との交易が行われていたものと考えられる。

また奥羽地方に見られる晩期の土器と寸分違わぬ所謂亀ヶ岡式土器も発見されている奈良県の橿原神宮外苑の遺跡からは晩期の土器と共にタイ、フタ、エイなどの魚骨が発見されており、これも大阪湾方面への交易圏を持つていたことを考えさせるものである。

橿原神宮外苑遺跡からは東日本の晩期の土器と共に西日本に分布する晩期の土器も出土している。

最近東日本の晩期の土器である広義に龜が岡式と呼んでいるものが紀伊水道に面する和歌山県下の日高川流域、日高郡丹生村和佐遺跡で復原した鉢形土器二個を含めて数点が偶然の機会に発見されている。その復原された鉢形土器の一つは奥羽北部にも見られる大洞B式土器と寸分異らぬものであることは注目すべきである。また大阪府国府遺跡でも僅かな量であるが龜が岡式土器片の発見が知られており、龜が岡式土器の文化は和歌山県下から大阪府までの、紀伊水道から大阪湾岸にまで及び、大阪湾西部の兵庫県下にまでは波及しなかつたもののようである。即ち奈良方面からの交易圏の關係で、大阪、和歌山県下にまで及んだものと考えられる。また奈良県下の龜が岡式土器文化は琵琶湖沿岸から北陸地方へと交易圏が及びていたものと思われ、奥羽地方とは晩期前半には北陸路を通して繁く交渉があつたものと考えられる。

即ち大洞B式、Bc式へ兩滝式などと呼ばれている龜が岡式の前半の土器を出土する遺跡は北陸地方に多く、関東地方南部から東海地方に亘つ

てはその発見はあまり多くない。後者では安行2式、3a、3b式などの土器に伴つて僅かに発見される程度である。これは後者の地域が南関東を中心として別個な文化圏、交易圏を作つたからにほかならない。即ち古東京湾、駿ヶ渚、北渚など海岸線の屈曲に富んだ魚貝の豊富な海産物を全面に持ち、植物食料、野獸なども豊富な肥沃な土地を背後にひかえる関東地方の人々は、最も重要な食料資源や、大部分の石器の原石などはこの地域内における交易によつて充ちた生活が営めるために、一つの異つた地方文化をつくりあげたものと考えられる。

しかし骨角製の釣針、話などの膠着剤としての天然アスファルトであるとか、装身具に使用の硬玉など他域からの移入を必要としたものもあり、周辺の他地域と全く没交渉であつたわけではなく、内部の地域の如く、繁く交易が行われなかつたのみと云うだけであり、従つて周辺の地域に流行した大洞B式、大洞Bc式などの土器の器形、文様なども当然この地方に受け入れられ、若干数では

あるが他地域の流行品として、当時のこの地方の一部の人々に珍重されたものであろう。またこの中には南東地方でつくられたものもあるが、小形なもので、この地方の粘土で焼かれたとは思われぬものなどは土器自体が交易品として奥羽地方などから渡来したものであるかも知れない。

奥羽地方から北陸地方を経て畿内へのルートに一つの大きな文化圏が出たのは如何なる理由からであらうか、日本海岸は海岸線も短く、或る時期に河川を上る難、鱒などを捕獲する以外にこの地方に重要な食料資源がなく、他の広い地域と交易を行わなくては縄文文化晩期の時代の生活程度においては、充分な安定した生活をするここができなかったのではなからうか、また冬期の豪雪地帯に云うことも肉建のあることがうかもしれない。またこのルートが奥羽地方特産の樹脂塗料へおそらく漆を畿内地方へ交易品として送り出す道であつたとも考えられる。この樹脂塗料の交易は、畿内の縄文文化晩期の時代より前期の弥生文化の時代にまで続いたものと考えられ、このへんに北

陸方面への前期の弥生文化の侵透性が比較的早かつた原因などがあるとするは興味深いことであるが、まだこれを裏付けるまでには至っていない。このようなことを早急に結論づけることは極めて危険であり、一つの思いつきとして今後の研究の成果に待つて、このようなことが考えられるか否かを究明したいと思うものである。時代はこれより数世紀遅れるが、秋田から津軽へと、北上川流域から馬淵川流域へとよりも早い時代に、稲作文化、即ち弥生文化が伝播したことは、肥沃な平地のあることも重要な条件ではあつたが、太平洋岸より自然の食料資源に恵まれなかつた点なども、稲作を早く受け入れるべき要因をなしたものでないかと考えるが如何なものであらうか。

以上に記した如く縄文文化時代においても交易は頻繁に行われ、その行動範囲も想像以上に広く一つの流行がこの交易圏内に広がる傾向は極めて短日月であつたと思われる。また彼等が丘陵地帯や高地の尾根道を交通路にしての一日の行程は、文明人のわれわれには想像もつかぬほどの遠距離

を衆々と踏破してゐるのであつて、大阪湾より奈良盆地の極原ぐらゐは彼等の脚であれば半日行程ぐらゐのものがあつたと思われる。三角寛氏の研究によると山高の尾根道を踏破する速度は大体これに匹敵する程度の速さで、横に飛ぶように走り、私達には想像も出来ぬほどの速さであると言ふ。これは体力の相違、骨組、筋肉などにも文明人と違つた差違があるからで、縄文文化人や、近世のアイヌに見られる扁平脛骨はこの山野を急速な早さで踏破するに便利に発達した骨組だったのである。

縄文文化時代の交易路を、現在の如く河川に沿つた道を考へる人があるが、未開拓の時代には、平地は河川の岸辺まで原生林が繁茂し、断崖絶壁に直面し、河川は深い淵をなすこともあり、また断崖の瀑布もあり、密林地帯には熊などの危害を及ぼす野獣もあり、見通しのきく、樹木もまばらな尾根道は縄文文化時代から歴史時代に入つてまで最も安全な交通路をなしてゐたのである。

また奥羽地方北部に流行した大洞式土器と全

く同一器形の同一文様のものが北陸から畿内にまで波及してゐると言ふことは、その技術が隣接する部落から隣接する部落へと次々に伝へられて行つたものではないと考へる。何故ならば、このようにして次々に伝へられたものであるとすれば、その最初の場所であつたものと、最も遠距離の地のものの間には、その中途で若干の改良変化が加えられたりして、かなり異つた特徴があらわれくるものと思われる。それがほとんど変化のないと言ふことは、一集落で土器製作に従事する人はある限られた人々であつたと思われ、この中の一部の人が新しい流行文様、器形などを何処かの一中心へ技術取得にゆくと言ふ如きこともあり、この取得した技術を村々へ持ち歸つて新しい技術が伝へて行つたものと想像される。従つて假りに奥羽北部に発生した新しい流行があつたとして、それが近畿地方に及ぶのには数年を経なければと思われる。即ちいくつの中継基地を経て、僅かな年月で近畿地方にまで伝へたものと思われる。

以上はあくまで假説であり、大洞B式・雨滝式などの流行文様の発生地は何処の地方であるか未だ明らかでない。ただ分布範囲が近畿地方以東、奥羽地方北部から北海道南部にまで及び、こゝに奥羽地方から北陸地方を経て近畿地方の滋賀・奈良・和歌山県下へ延びる線に中部地方以西では比較的分布が濃密なことなど注意すべきで、一応この花がった地域は明かにされているのである。

そしてこの地域では土器のみでなく伴出の土製品、石器などにも共通したものがあり、私達の考古学的な常識論からすれば、西日本と東日本の縄文文化の終末は殆んど同時期であつたと考えられる。従つて奥羽北部における縄文文化の晩期末の年代も大体BC一世紀の頃ではなかつたかと思つてゐる。しかしこれについては現在積極的証左はなく、AD四世紀前後にまで下降して考えることも説に対して、明確な反証例を示すことは困難である。しかし年代を降して考える例にも、文献上以外のことと確証と思われるものはない。

青森県下の縄文文化晩期末の大洞A式以降の遺跡、遺物に関する研究の今日までに公表されたものは極めて少く、一部の人はこのような文化が、青森県下にまだ縄文文化晩期が栄えた頃、弥生文化の開拓の先駆者が、その弥生文化の後期の頃の入植してきたものが遺したものではないかなどと考へ、弥生文化と縄文文化の重複した時期の存在を考へ、奥羽南半から南東地方以西に弥生文化後期の文化が栄えた頃、青森県下ではまだ縄文文化晩期の文化が引続き栄えていたのだとしたのである。

しかし青森県下で縄文文化晩期の大洞B、既、C₁、C₂、A、A'式の各式土器が層位的に編年されるように、A'式に引続く所謂続縄文文化の土器もA'式の上層から発掘されると云う遺跡が県内ではくつかり知られているのである。そして津軽半野では田舎館遺跡で多量の炭化米が発掘され、これが弥生文化に入るものであることが明らかになつたが、八戸、下北方面では土器のみの発見で、未だ稲作が行われていたとの確証は把握できないので、

奥羽南半の弥生文化から鉄器などのみ受け入れた、生活様式は縄文文化晩期の時代とはあまり変りない変則的な縄文文化の時代へ移行していたと一応考へておくべきであらう。また北海道の渡島半島も同一の状況下にあつたと思われるが、當つて河野常吉氏（河野広道博士殿父）が渡島半島より有孔の磨製石斧・石器を発見しており、これは弥生文化の遺跡から発見されるものと寸分違ひぬものであり、或は渡島半島南部の一部には弥生文化の後期末頃には稲作が行われたのではないかの疑ひも起るが、これも今後の調査研究によりて究明すべき問題である。

青森県下の大岡A式以降の弥生文化、並びに縄文文化に該当する土器は、まだ編年的研究が充分とは云えないが、少くとも三形式以上の編年されるように考へられる。

この次に土師器の文化があり、最初は須恵器を伴つたものが数形式あり、次に須恵器を伴うものがあらわれる。舊、即ち土城址は須恵器を伴う時期になつてからあらわれたもので、この築造時

期も数世紀に亘つたものと思われる。この土師器、須恵器の変遷は奥羽地方南部や関東地方と大略同一であつたと見て差支えないようである。

しかし青森県下にはこの時代の遺物として注目すべきものがある。

それは後期北海道薄手式縄文土器、略して後北式土器と呼ばれるものと、擦文土器である。これはいづれも北海道南半に広く分布するもので、奥羽地方では青森県下以外には殆んど見られぬものであり、青森県下でも下北半島北部と津軽半島北部以外では断片的にしか発見されていぬものである。

北海道で後北式土器は河野広道博士によりてa、b、c、d類と四区分されておられ、a類は、山内清男氏が本輪西上層式と命名されたものや、最近恵山式と呼ばれている私達が縄文文化の一形式と見做したものが該当しているが、b、c、d類は全く独自の文化で、本州の弥生文化との関連性は考へられないものである。下北半島の東北端、尻屋岬の近傍、尻屋には砂丘地に後北式c類の

土器片を多量に出土する遺跡が発見されている。ここからは鬼高式類似の土師器の破片もかなりの量が発見されているが、砂丘地のため層位関係はわからない。

八戸市附近にも後北式土器片の断片的に出土する遺跡は数か所知られている。また明治時代に佐藤新氏が三戸郡三戸町留崎で発見された小鉢形土器も後北式の類土器の完形品であった。

糠文土器は北海道では後北式土器に引続いてあらわれる土器文化であるが、私は下北半島の津軽海峡岸に面する海岸段丘上に竪穴住居址の断面を露出する糠文土器の遺跡を発掘調査したことがある。^{註7}この遺跡からは土師器、須恵器と共に糠文土器の中で最も特徴的な刻文土器片が多量に発見された。下北半島で刻文土器片を多量に発見したのはこの下北郡東通村稻峰遺跡と、大向崎に近い太向町割石遺跡のみである。

糠文土器に見られる所謂糠文は関東地方などの土師器にも見られる刷毛のようなものの糠痕文で、これを北海道の糠文土器の特徴として考へると、

土師器の文化圏深く入ってしまうが、これは誤りで、糠文土器文化の特徴は刻文土器であり、刻文土器片の認められる範囲が、糠文土器文化の波及範囲と見るべきである。

このように考へると青森県下での糠文土器文化の波及範囲は前代の後北式文化よりも狭い範囲で、下北半島と津軽半島の北部に限られてしまうようである。

私は北海道を中心にしたこの後北式土器、糠文土器を使っていた人々こそ、私達日本人の祖先とは違った異質的な人々でなかつたかと思うのである。また青森県下の遺跡でこれらの土器を多量に使っていた遺跡から人骨の発見がないので、決定的なことは云えないが、近い将来に人骨の発見でもあれば、この問題は一案に解決できるとあろう。青森県下では八戸、下北その他で近世のアイヌ人骨は発見されており、また茨城附近などでは嘗て人骨と共にアイヌのナラヌ玉などが発掘された例もあり、^{註8}遺骨や遺物からしても、また記録上からも近世に青森県下の各所にアイヌが住居を営

んでいたことは疑いない事実である。

しかし江戸時代より更に逆上つた時代のもと思われる遺物を伴つて出土したところアイヌ人骨は、今日までのところまだ発見例がない。また北海道においても近世のアイヌ人骨は明治以来多量に発掘蒐集され、研究されているが、年代の逆上つたものについては余り発見例も多くなく、人類学的に北海道の過去の人類の研究はまだまだ未開拓の分野が多く、後北式土器、擦文土器、オホーツク式土器などの時代の過去の北海道原住民と近世アイヌとの関連性についても疑問点は極めて多いようであるが、近年北海道大学医学部解剖学教室で児玉作左衛門博士が中心となり、鋭意研究を進められているので、近い将来に何等かの結論がわれわれの前に提示されるものと期待している。

以上の如くアイヌ自体の過去が不明の点多く、恐らくアイヌ人の祖先も、今日東京大学理学部人類学教室の鈴木尚博士による私達日本人の鎌倉時代から江戸時代の祖先の骨格の研究結果と同様に、現代における人種差以上の時代的変差があるもの

と考へられ、私達骨格人類学に全く専門外のものも考へても、骨格人類学的な見地からする人種分類、骨格の生活環境の変化による変移などという問題は、今後の研究の進捗と共に目まぐるしく変化し、過去の研究は前進への捨石とはなるが今後の研究には全く参考とならないものとなつてしまふことが明らかであるように思われる。

私は青森県下のところと居住した近世のアイヌと、奈良末から平安、鎌倉時代に青森県下の一部に居住した、後北、擦文の両形式の土器を残した人々は何等かの関連性があるのではないかと考へるが、これも将来両形式の土器に伴出の人骨の発見を俟つて、その人類学的研究によつて解決されるべき問題である。

そして私は青森県を含む奥羽地方北部で、縄文文化晩期と弥生文化へ統続文化も含む土器器Ⅱ土器器、須恵器と変遷した土器文化を残した人々は、奥羽南部、関東以西の人々と同様、遠い私達日本人の祖先であつたと思うものである。そしてまた土師器から土師器・須恵器の使用時代は、

西南日本と同様に大和朝廷に対立するような独立小国家、之類の国が発生していたものと考へるが如何なるものであらうか。

なおこの問題については改めて詳説し、諸家の見解に忌憚のない批判を加えたいと考えている。本稿は取敢ず前号の井上君の論考に対する批判をなし、私の見解の概略を記した次第である。

一九五八年一月二〇日稿了

註

- 1、井上 久 「縄文式土器文化期の地域差について」津軽、下北地方を中心として」(「岩手史学研究」二六号 昭和三二年一〇月刊)
- 2、井上 久 「津軽地方における石器時代の概略」(「弘前大学国史研究」一〇・一合併号 昭和三三年六月刊)
- 3、井上 久 「津軽地方における先史農耕について」(「東奥文化」一一号 昭和三

三年一〇月刊)

- 4、江坂輝弥 「縄文文化の特質」(「史学」二六卷 三・四合併号 昭和三八年六月刊)
- 江坂輝弥 「日本石器時代の文化六」(「縄文文化の終末とそれ以降の文化」)(「奥羽史談」六卷一号 昭和三〇年四月刊)
- 江坂輝弥 「奥羽地方北部の縄文文化の問題」(「貝塚」六三号 昭和三三年四月刊)
- 5、西村正衛・櫻井清彦・玉口時雄 「青森県森田村附近の遺跡調査概報」(「古代」五号 昭和三七年四月刊)
- 6、林 善茂 「アイマの穀物收穫技術」(「日本人類学会、日本民族学協会第一三回連合大会研究発表 昭和三三年一〇月於新潟」この研究発表に際して、河野常吉氏採集の石器を持参供覧した、(現在河本道博士代藏品)
- 7、江坂輝弥 「青森県下北半島稲崎遺跡調査報告」(「古代」一一号 昭和三八年二月)
- 8、成田彦栄代藏品、成田彦栄氏談。